

# ゼロ・1歳児「混合」保育から年齢別保育への移行による 保育内容の変容

— 保育者へのインタビュー調査をふまえて —

## Changes in Childcare Content due to Transition from Zero- and One-year-old Combined Childcare to Age Specific Childcare

— Based on Interview Surveys with Childcare Worker —

横井喜彦\*, 浅沼裕治\*\*

Yosihiko YOKOI, Yuji ASANUMA

### 要 約

岐阜県東濃地域の保育園・こども園では、ゼロ歳児保育の要求や設備など環境的条件などにより、ゼロ歳児と1歳児との「混合」保育が珍しくない。一方、他の年齢クラスにはないゼロ歳児保育の専門性についても実践的な研究が進み、あえてゼロ歳児・1歳児との「合同」保育を進めている実践も存在する。本稿は、岐阜県東濃地域にあるA保育園において、ゼロ歳児・1歳児「混合」保育から空間を区切りゼロ・1歳児のクラス別保育へ以降することにより、子どもたちや保育者のなかでどのような変化があったのかについての1年間の経過観察を行った。その観察記録をもとに、実践した保育者へインタビュー調査を行い、それまでの「混合」保育とクラス別保育の内容の差異、および保育者の意識の変化について考察を行った。さらに条件的に「混合」している保育から意識的に「合同」で保育を進める保育のあり方を示唆した。

### キーワード:

ゼロ歳児、混合保育、合同保育、クラス別保育

## I はじめに

本学に近接する岐阜県東濃地域の保育園等では、ゼロ歳児を含めた「混合」保育を行っているところが少なくない。本学において保育科の学生たちが行った「保育所実習(1年次・2年次)振り返りアンケート」の記述内容からも、ゼロ歳児を含む「3歳未満児クラス」として保育を行う、いわゆる「混合」保育が多いことが読み取れる。また、2017年度以降に「岐阜県教員免許状更新講習」にて「ゼロ歳児保育」をテーマとして筆者が講習を行った際に、ゼロ歳児が単独クラスで存在している園は少なく、講習参加者から「ゼロ歳児を含む混合保育のすすめ方」についての悩みが多く出された。これらのことから、東濃地域では、ゼロ歳を含む「3歳未満児クラス」での「混合」保育の比率が高いと思われる。このような現状を考

えたとき、他の年齢クラスとは違い、生活面(例えば、離乳食を始めとする生活づくりとリズムの形成)・あそび(例えば、細かな年月齢において適切なあそびの指導や遊具等の設定など)において独自の専門性を必要とする「ゼロ歳児保育」の質が、「混合」されることで保たれているのか、といった疑問が喚起される。

そこで本稿では、このような問題意識に基づき、ゼロ歳児保育に必要とする専門性を保障するための保育条件・環境をどのようにつくりあげていくのかを課題とし、ゼロ歳児を含めた「混合」保育を行ってきた園が、新たにゼロ歳児を分離してクラス別保育へと以降してきた1年間の観察することで、分離前と後で保育に対する視点にどのような変化がみられたのかを調査・考察する。

\*本学教授, \*\*本学専任講師

## Ⅱ 先行研究

保育所保育指針において「保育は環境を通して行う」としているように、保育において「環境設定」は重要な要素のひとつである。さらに、3歳未満児においては、園・保育者の意図的な環境設定が保育内容や子どもの心身の成長にも大きく影響する。乳児保育の環境設定で村上（2009）は、「環境条件としての空間編成」として、空間を区切ることによって子どものあそびにどう変化をもたらすのか研究を行い<sup>(1)</sup>、わずかな環境の設定の変更が子どものあそびの変化に大きく影響することを示した。また横井（2013a）「0歳児クラスの運動発現の要因としての保育環境」<sup>(2)</sup>および横井（2013b）「9か月前後の意図理解から発現される運動」<sup>(3)</sup>において、運動発現の視点からゼロ歳児クラスの環境設定の工夫の必要性が論じられている。このようにゼロ歳児独自の保育の専門性を保障するための環境設定の重要性は、これまで多くの先行研究からみることができる。

異年齢保育の実践的な研究も近年、進められている。全国保育問題研究協議会では2016年から「特別分科会・異年齢保育」を創設し、実践討議が始まった。そのきっかけとなった宮里（2012）の問題提起として、『『仕方がないから異年齢保育』から、年齢別にクラス編成できる保育園でも『あえて異年齢保育』に取り組む園が増えている』<sup>(4)</sup>として異年齢保育の形式を定義づけ（後に前者を「条件的異年齢保育」、後者を「理念的異年齢保育」として区別する）、主に「理念的異年齢保育」の実践検討を中心に「異年齢保育」の研究の必要性について述べている。しかし「条件的異年齢保育」は地域的な側面を抱えており、特にゼロ歳児を含む異年齢保育については、まだ十分な研究が進められていないのが現状である。

## Ⅲ 研究の背景と方法

ゼロ歳児クラスの専門性を考えて独立したクラスとして環境構成や空間編成を設定しているのに対し、ゼロ歳児クラス含めて3歳未満児を「混合」保育で行っている園が少なくない地域がある。

本研究では、共同研究として、ゼロ歳児・1歳児混合保育を行っていた岐阜県内にあるA保育園において、保育室にロッカー等で「しきり」を設けて空間を区切り、クラス別保育へと移行したことによって、どのような変化があったのか1年間観察を行ってきた。その観察記録を基に、当該園にてクラス別保育を実践した保育者に対して、その活動を振り返りながら、その時の思いや課題についてインタビュー調査によって聴取し分析を行う。そして、この方法により、それまでの混合保育と1年間の年齢別保育の差異および効果について考察を行う。

インタビュー調査は、対象園の会議室においてプライバシーが担保された個室にて行った。また、音声は、調査協力者の承諾を得たうえで、ICレコーダーに録音し、調査後、逐語録をおこした。インタビューの実施は2019年3月である。

インタビューは半構造化面接法により行った。テキスト分析のためのソフトウェアはKHcoder（Version 3 .Alpha.09 h）を用いて結果を導出した<sup>(5)</sup>。

なお、対象者には調査の内容・目的・方法・結果の公表、個人情報の取り扱い等についてインタビュー調査説明書に記載し、調査協力者に確認／理解を求め、文書にて同意書を取り交わした。本研究は中京学院大学短期大学部研究倫理委員会の倫理審査で承認を得たのちに実施した。

## Ⅳ 結果

### Ⅳ - 1 2017年6月の状況

2017年6月時点での室内図を図1で示す。そして、ゼロ歳児・1歳児クラスにおける保育者の語りの共起ネットワークを図2に示す。

この年は、ゼロ歳児・1歳児「混合」保育を行っている。そのため「一緒」、「歳」といった語の出現頻度が高く、それに関連した「保育」に連なる語として「楽しい」「泣ける」「寒い」という語が共起している。「連れる」、「外」の連なりから、1歳児に合わせた戸外活動のなかで、ゼロ歳児が寒さや眠さで泣いてしまったり、「合わせる」、「お

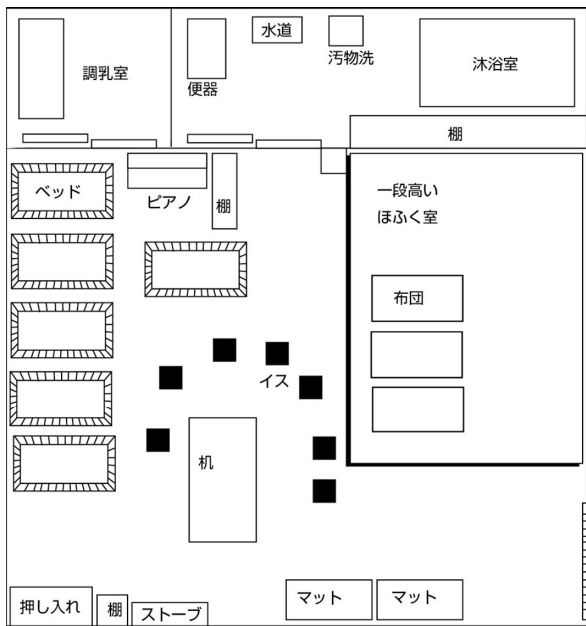


図1 室内環境図 (2017年6月)

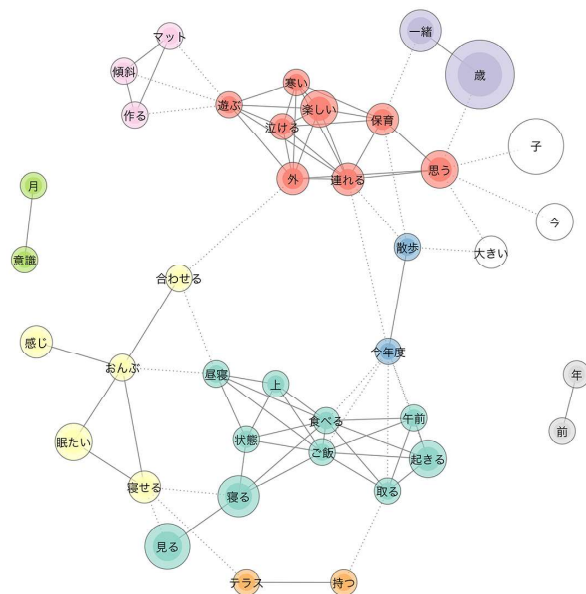


図2 共起ネットワーク（2017年振り返って）

んぶ」、「眠たい」と連なりから、おんぶされて過ごしたり、そのまま寝てしまうなどの場面が語られている。

同様に、「月一意識」が他と分離している。ゼロ歳児保育は年月齢が保育内容に大きく関わる時期であるにもかかわらず、食事・遊びに関連する語と連っていないということは、年月齢の意識が生活や活動とつながりきれていないことを示している。

IV - 2 2018年4月～7月（主に6月の様子）までの状況

次に2018年6月の室内環境図を図3に、そして2018年4月～7月時点での保育者の語り（主に6月を中心に）の共起ネットワークを図4に示す。

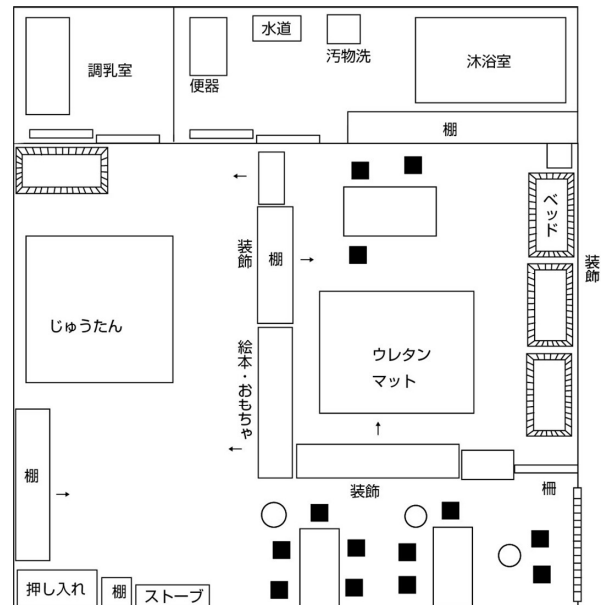


図3 室内環境図（2018年6月）

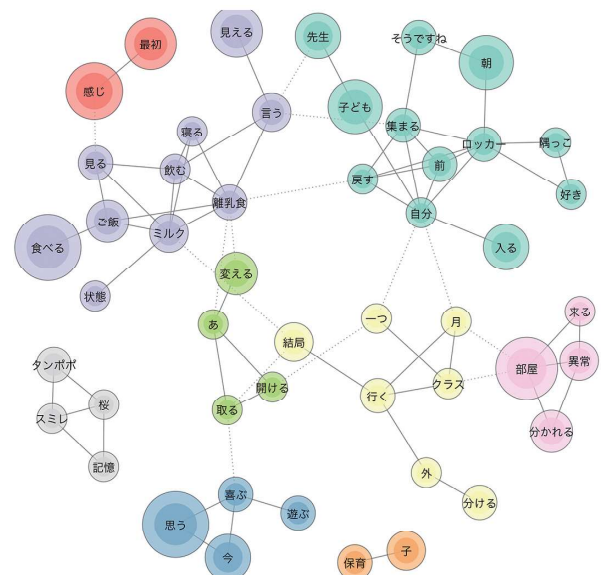


図4 共起ネットワーク（2018年6月）

18年4月より、一段高い場所を撤去しフロアをロッカーで仕切りをつくり、年齢別保育を始めた。初めてクラスを分けて保育を行ってきた戸惑





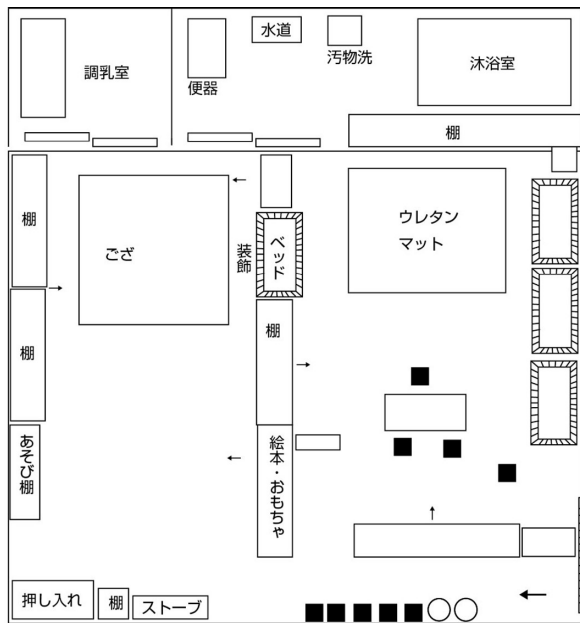


図7 室内環境図 (2019年3月)

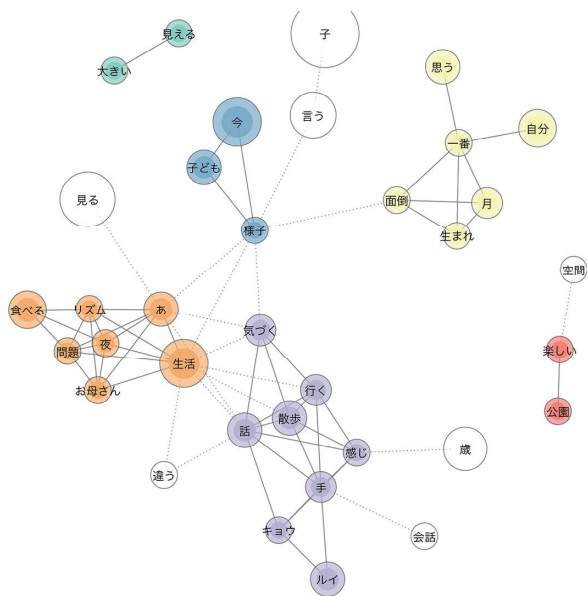


図8 共起ネットワーク（2019年3月）

「生活」を起点にして「食べる」、「リズム」、「気づく」といった語が共起している。ゼロ歳児保育を通して、それぞれ個々の家庭の生活の「リズム」づくりといった課題に「気づく」ことが多くなってきたことが、「問題」、「夜」、「お母さん」にも現れている。

遊びの面では、「散歩」、「感じ」、「手」、「話」など共起している。歩行も安定し、近くの公園に散歩に行く機会が増えてきたこと、そのなかのエ

ピソードを具体的に話し、子どもの名前が具体的に  
に出てくるなど、子ども同士の関わりに関する語  
りが特徴となっている。

## V まとめ

## V - 1 ゼロ～1歳児の「混合」クラスの難しさ

17年6月は、ゼロ歳児・1歳児の「混合」保育を行っている時期である。「遊ぶ」と関連して「作る」、「傾斜」、「マット」などの語句は、室内にある一段高い場所を利用して「運動を発現させる」取り組みを進めていた時のことである。その設定では、1歳児に刺激を受けるゼロ歳児の姿は見られたが、ゼロ歳児独自の設定はなかった。また、先にみたように、戸外での活動等で、1歳児の子どもたちを中心とした設定を行っており、ゼロ歳児は「だっこ」されたり「泣ける」状況もみえてくる。これは、「月 - 意識」が他の活動やあそびと関連していないことをみても、「月」＝ゼロ歳児の月齢ごとの発達の特徴についての保育者側の意識が薄れてしまったのではと考えられる。

つまり、ゼロ歳児・1歳児「混合」保育の中では、ゼロ歳児の発達課題・あそびの欲求がみえにくくなってしまうことが課題だと考えられる。

## V - 2 生活においてみえてくるもの

あそびの欲求だけでなく、生活においても、ゼロ歳児を分離することで、その専門的保育の性質がみえてくる。例えば、18年9月では「離乳食」について語られている。分離後、ゼロ歳児クラスの子どもがそろい、安定してきた9月の保育を観察した際にも、離乳食の段階について保育者側から「段階を戻すかどうか」と相談を受けた。一人ひとりの子どもたちの家庭での食事の様子の把握も含めて、「離乳食」がゼロ歳児の大きな生活の課題のひとつとして意識して取り組んだ時期でもあった。19年3月では食事を含めてゼロ歳児の生活リズムの安定の必要性が保育者側から話された。

「混合」クラスでは、ゼロ歳児の個々の離乳食の課題や睡眠も含めた「生活リズム」の課題が、

やはりみえにくい状況であったことを示唆する内容でもあった。

### V - 3 関係から見る保育の質

18年9月に訪問すると、子どもたちは知らない人が来たことにより、保育者のそばに近づきこちらを伺っている様子が見られるなど、保育者と子どもとの間にアタッチメントの形成が観察された。また保育者が積んだ布積み木を、子どもが保育者の顔を伺いながら崩す場面において、保育者との「社会的参照」を示す場面も観察できた。つまり、この時期の発達的主要な課題でもある保育者との安定した関係づくりが形成されていることが観察された。

また子ども同士も、ベッドの下に潜り込んだり、積み木を倒して一緒に笑い合ったりと、共感する場面が多く観察された。そのことは共起ネットワークの「子ども」、「同士」、「みる」、「顔」といった出現語からもみることができる。

19年3月では、ゼロ歳児と1歳児の仕切りをなくしたことで1歳児とゼロ歳児の行き来も始まっていた。そこでは「ゼロ歳児から1歳児への接続」を意識した働きかけや、1歳児の子どもの模倣を行う場面なども観察された。

子どもと保育者、子ども同士の関係形成が、分離することによって保育者も意識的になること、そして実際に子どもたちの姿にも変化が見られたことは、今回のインタビューの中にも表れていることが分かる。

また、ゼロ歳児独自で散歩を行うなど戸外まで活動範囲が広がったことや、それぞれの子どもたちのエピソードが具体的に聞かれるなど、この1年間の中で、ゼロ歳児の子どもの具体的な姿がよりはっきりしてきたことが明らかになった。

### V - 4 「混合」から「合同」へ

前述した「理念的異年齢保育」は、意識的に年齢別クラスを異年齢クラスにすることを示す。ゼロ歳児を意識的に異年齢クラスにするケースとして、例えば、「ゼロ歳児低月齢」・「ゼロ歳児高月齢」

1歳児低月齢」・「1歳児高月齢」と、年月齢の発達を細かく保障するかたちで期間限定的にクラス編成を行う実践が報告され、落ち着いた生活、発達に見合ったあそびの提供、子ども同士の刺激などの保育効果も報告されている。このようなかたちを「合同」クラスと仮定する。

一方、地域的にゼロ歳児が少ない、4～5月段階にゼロ歳児の入園がない、また条件的に一緒にスペースでしか保育ができないなどの条件から、ゼロ歳児も含めての「混合」クラスも少なくない。前述した「条件的異年齢クラス」に相当する保育クラスとして、「混合」クラスと仮定する。

実際に保育を進める中で、ゼロ歳児の専門性に目を向け、それを保障する保育を目指すためにも、「混合」クラスで保育を行うことから、クラス別保育を行えないか、また意識的な「合同」として検討をすすめることが望ましいと考える。

#### 注

- 1 村上博文：“乳児保育室の空間変性と“子ども及び保育者”の変化—K保育所0才児クラス：自由遊び時間におけるアクションリサーチ”、東京大学大学院教育学研究科紀要、第49巻、2009年
- 2 横井喜彦：“0歳児クラスの運動発現の要因としての環境設定—環境設定から発現される「くぐる」運動—”、中京学院大学中京短期大学部研究紀要、第43巻第1号、pp41-53、2013年a
- 3 横井喜彦：“9か月前後の「意図理解」から発現される運動”、明星大学通信制大学院研究紀要 教育学研究、第12号、pp11-19、2013年b
- 4 宮里六郎：“異年齢保育実践を深めるために”季刊保育問題研究、254、2012年
- 5 樋口耕一“社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—”ナカニシヤ出版、2014年